



第110号 別冊
北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」
2023.9.1

特別講演会 報告書
『ブロニスワフ・ピウスツキの遺したもの』
(札幌エルプラザ、2023年3月4日)

講演1 ブロニスワフ・ピウスツキが集めたアイヌの衣類

佐々木 史郎

ブロニスワフ・ピウスツキは、ロシア皇帝アレクサンドル3世暗殺未遂事件に連座してサハリン（樺太）に流刑にされたことを契機にして、その地域の先住民族に関心を持ち、その後、サハリンだけでなく北海道や大陸側のアムール川流域などで民族調査を行った。特にサハリンのニヴフとアイヌとは長年にわたり交流を続け、その文化や言語を丁寧に調べている。またその経験に基づいて、帝政ロシアの植民地政策の中で貧窮化していく彼らの生活を改善させるための施策も提言している。



1. ピウスツキのアイヌコレクション

ピウスツキは調査に際して、当時最新の調査機器だった写真機と蝋管録音機を利用した。それにより、調査当時(20世紀初頭)の人々の姿がガラス乾板に写し出され、生の声が蝋管に刻まれて後世まで残されることになる。また、音声や映像のデータと同時に、彼は膨大な量の実物資料を集めて、ロシア各地の博物館に納めた。

ピウスツキが収集した写真、録音、実物の各資料は現在ヨーロッパとロシアの博物館や大学に収蔵されている。その中で実物資料は、ロシアではサンクトペテルブルクのロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学民族学博物館(通称クストカメラ、以下「クストカメラ」)とロシア民族学博物館、ウラジオストークのV・K・アルセニエフ記念沿海地方総合博物館、ユジノサハリンスクのサハリン州立郷土博物館に、ロシア以外ではドイツ・ライプツィヒの民族学博物館とオーストリア・ウィーンの世界文化博物館などにそれぞれ収蔵されている。

本講演ではピウスツキが収集した実物資料のうち、主にロシアの博物館に収蔵されているアイヌの

衣類とその周辺資料について述べる。

この講演は、6年にわたって実施したユーラシア北方地域の織物文化に関する調査研究プロジェクト(「北方寒冷地における織布技術と布の機能」2014～16年度と「アイヌ民族の衣文化交流」2017～19年度)の成果の一部でもある(佐々木2020を参照)。

このプロジェクトは、北方地域では珍しい独自の織物を製作する民族の布文化と衣文化についての調査研究で、サハリンの樺太アイヌは東アジア地域では独自の織機と織布技術を持つ最北の民族である。彼らの北隣のニヴフやウイльтаは布を織る技術と用具を持っていなかった。彼らにはイラクサなどの植物から繊維を取りだして糸や紐を作る技術やごぎを編むための技術と用具はあったが、織機と布を織る技術が見られない。そのような民族とアイヌとは衣文化にどのような違いがあるのか、あるいはなぜ樺太アイヌにまで普及した織機がそれ以上北進しなかったのか、といった問題を考察した(後者の問題は結局解けなかったが)。

ここでは私が調査したピウスツキ収集のアイヌの衣類を紹介し、その特徴と収集の時代的な背景についても探っていきたい。

2. ピウスツキが収集したアイヌ衣文化資料

ピウスツキが収集したアイヌ関連コレクションは、サントペテルブルク、ウラジオストーク、ユジノサハリンスク、ライプツィヒ、ウィーンなどの民族学関連の博物館に収蔵されていることがわかっている。それは1990～2000年代前半にかけて、小谷凱宣先生(名古屋大学→南山大学)とJ・クライナー先生(ボン大学)が中心になって実施された欧米の博物館に収蔵されるアイヌ関連資料の体系的な調査の結果で、特にロシアに関しては荻原眞子先生(千葉大学)が代表者を務めた科研のプロジェクトの成果である(大学名はプロジェクト当時の所属)。

まず、サントペテルブルクのクンストカーメラ収蔵資料では以下の番号がついたコレクションがピウスツキの収集とされている(Spb-アイヌプロジェクト調査団編1998)。

- 700番台(台帳記載年1903、推定収集年1902-05、収集地:サハリン)
- 829番台(台帳記載年1906、推定収集年1902-05、収集地:サハリン)
- 837番台(台帳記載年1904、推定収集年1902-05、収集地:サハリン)
- 839番台(台帳記載年1904、推定収集年1903、収集地:北海道)
- 1039番台(台帳記載年1906、推定収集年1902-05、収集地:南サハリン)
- 2803番台(台帳記載年1903、推定収集年1902-05、収集地:サハリン)
- 3125番台(台帳記載年1914、推定収集年不明、収集地:サハリン)

その中には多数の衣類、布類と織機が含まれ、私のプロジェクトで調査したのは以下の通りである。

- 700-162 女性用毛皮服。アザラシとクロテンの毛皮のほか、木綿、獣毛糸、和紙。収集地:サハリン西海岸マウコ(真岡)
- 700-227a 女性用の下帯。木綿、毛織物(羊毛)、ガラスビーズを使用。収集地:サハリン東海岸
- 700-235 男性の下帯。着古されたテタラペ(イラクサ繊維の服)が材料。収集地:サハリン東海岸(大きさから見て子供用と思われる)
- 700-300 男性の下帯。着古されたテタラペが材料。収集地:サハリン東海岸(大きさから見て子供用と思われる)
- 829-373a シャマンの頭帯。木綿と絹、縫製糸と

刺繍糸は絹。収集地:サハリン東海岸

- 829-373b シャマンの頭帯。日本製の型染め木綿と装飾に綾織り絹。収集地:サハリン東海岸
- 829-374 首帯(チョーカー)。木綿(タテヨコ緋)、絹、羊毛。収集地:サハリン東海岸
- 829-406 刀掛け帯と刀。帯の基本部分は樹皮繊維のもじり編み、装飾に藍木綿、赤い獣毛糸、下がり木綿布、魚皮、木綿糸を使用。収集地:サハリン東海岸
- 829-437 織機(織りかけ)。張られている糸は草皮繊維(イラクサ)、タテ糸310本。収集地:サハリン東海岸
- 839-17 上衣(相当古されている)。地布は樹皮と木綿の交織布(緻密なタテ畝織り)、補修・補強の当て布に木綿。収集地:北海道
- 839-86 上衣。地布は樹皮・木綿交織布(タテ緋タテ畝織)、装飾に赤白の羊毛のパイル織り、糊防染型染めの木綿、縫製糸は樹皮繊維。収集地:北海道
- 839-195 男性用上衣。地布は平織りの藍木綿、切り抜き文に平織り白木綿。収集地:北海道
- 839-199 男性用上衣。地布は平織り糊防染型染め、襟にパイル織り、襟の下に平地タテヨコ緋、当て布にタテ緋タテ畝織りが使われる。収集地:北海道
- 839-184 織機。張られている糸は樹皮繊維(オヒョウ)、タテ糸314本。収集地:北海道

次にウラジオストークの沿海地方総合博物館では、904番台がピウスツキ収集のコレクションで、調査できた衣類は次の1着だった。

- 904-5 子どもの衣装。地布は草皮繊維(イラクサ)の平織り、木綿、ガラスビーズ。収集地:サハリン

ユジノサハリンスクのサハリン州立郷土博物館のピウスツキ収集資料は、ウラジオストークの沿海地方総合博物館から移管されたものだった。そのうち調査したアイヌの衣類は以下の2点である。

- 1859 maizar(前掛け)。表地は藍木綿、裏地はプリント柄の木綿。収集地:サハリン
- 1861 魚皮衣。魚皮(52枚使用)、木綿。収集地:サハリン・コルサコフ郡

3. ピウスツキの収集の歴史的背景

ピウスツキがサハリンや北海道で活発に資料を収集した年代は1902～05年である。日露戦争(19

04～05)にかかっている、そのために、ピウスツキはアイヌの女性とともに築いた家族を置いてサハリンを後にせざるをえなかった。また、彼が収集活動をしていた時代は樺太千島交換条約(1875)からほぼ30年経た時代でもあり、その間帝政ロシアは先住民族たちを実質的には統治していなかったもので、実態があまりよくわかっていない。

ロシアはサハリンをピウスツキのような政治犯や殺人や強盗事件などの刑事犯を厄介払いする島として利用するために、また石炭や石油のような鉱物資源を開発(収奪)することを目的として、サハリンを強引に領土に組み入れた。そのとき、帝政政府には先住民族を直接統治する、あるいはその安全や生活を保障するような体制を築く気がなかったようである。それは、ピウスツキの初期の報告書や論文に書かれている当時のアイヌやニヴフの状況から推測できる。当時のアイヌは江戸時代の場所請負制が廃止され、樺太千島交換条約の後には日本の役人たちも去り、その後には樺太南部を領有したロシアもアイヌに対する統治をきちんとしていなかったということで、外からの縛りから解放され、自律性を回復した状態にあった。しかし、ロシアはサハリンを流刑地に利用し、資源を収奪することしか考えていなかったため、アイヌの社会は治安面と経済面で深刻な問題に直面する(詳細は田村報告を参照)。

ピウスツキが刑期を終える前後の1897年に初めてロシア全土で国勢調査が行われた。それによれば、アイヌはサハリン南部(コルサコフ郡)を中心に55の村(コタン)、301世帯、1,442人(男761人、女681人)が数えられている。その内訳は、サハリン東海岸に29村、143世帯、736人(男396人、女340人)、西海岸に26村、158世帯、701人(男361人、女340人)、サハリンのアイヌの村以外の場所に5人(男4人、女1人)である(S・パトカノフが1912年に編集した国勢調査の報告書による)。樺太千島交換条約の結果、1875年に日本政府は841人の樺太アイヌを北海道北端の宗谷に移住させ、さらに翌76年には小樽を経由して対雁の移住地に強制的に移した。そこで半数近くが疫病等で命を落としている(田村報告参照)。ロシアの国勢調査の結果から19世紀末のサハリンには、北海道に行かなかった樺太アイヌが1,400人ほど住んでいたことがわかる。

サハリンの外ではアリューシャン列島のメードヌイ島に14人(男7人、女7人)がいた。彼らは樺太千島交換条約後のシコタン島への強制移住を拒否した千島アイヌの子孫と考えられる。また、アイヌの村落には155人(男126人、女29人)のロシア人と83人(男81人、女2人)の日本人が数えられている。

他方、コルサコフ郡全体ではロシア人5,047人(男3,752人、女1,295人)、日本人218人(男208人、女10人)が登録されている。ロシア人と日本人では男女比に大きな偏りが見られるが、それは開拓移民政策の特徴で、当初は男が中心になって入植したこと、特に日本人の場合には漁業従事者が大半だったことが関係していると考えられる。

4. ピウスツキ収集のアイヌ衣文化資料の特徴

帝政ロシア支配時代(1875～1905)の南サハリンで、アイヌに関する民族資料を体系的に集めた人物ではピウスツキの右に出るものはいないといっても過言ではない。それは彼が流刑とはいえ10年以上にわたってこの地域に住み続け、さらに地元のアインの女性と結婚して家庭生活を送っていたことが大きかったと考えられる。例えば、女性用の下帯(700-227a)のようなものまで収集しているが、これは通常は男性には絶対手にできない(女性でも他人には見せない)ものである。また、いかにも着古したテタラペから作ったと思われる子どもの下着(700-235と700-300)を収集しているが、これも家族を持ったからこそ手に入れることができたものと思われる。

ピウスツキが収集したアイヌの衣装を見ていて、気がついた特徴をいくつか列挙してみよう。

1) 全体的に見て素材、製作技法、デザインに伝統的なものが多く使われ、しかも現代の基準で見ても優れたものが多い。

テタラペにせよアハルシ(北海道ではアットウシ)にせよ、また魚皮衣や獣皮衣でも、伝統的な繊維素材を使用した衣類では、その織りが緻密で糸の太さもそろっているものが多く、縫製や刺繍も確かな技術で縫い目も細かく揃っていて、丁寧に作られている。それは優れた技術を受け継いだ人がまだ数多く残っていて、ピウスツキはそのような人たちが作ったものを収集することができたからと考えられる。またポーランドに残されているピウスツキの肖像画(11頁のチラシ表を参照)では、見事なアップリケと刺繍で飾られたテタラペを着用した姿で描かれているが、それは作った人の彼に対する愛情がにじみ出ているようにも見える。そのようなことも、彼が収集した衣類に見事なものが多い理由かもしれない。

2) 実際に使用されたものが数多く収集されている。

使用された痕跡がある資料は、その使用者、方法、時期、場所などの情報が付加されている点で、学術的、博物館的には価値が高い。しかし、誰か

が使用していたものを譲ってもらう(有償でも無償でも)ことはよほど信頼関係がないとできない。ピウスツキの収集した資料は彼が地元の人々に信頼されていたことを物語っており、それはやはり家庭を持ったことが大きかったのではないかと考えられる。

3)ピウスツキの収集した布類にいわゆる「蝦夷錦」が少ない。

北海道を初め日本各地の博物館には「蝦夷錦」と呼ばれる龍文が描かれた中国製の絹織物の衣類や布が時折見られる。それらは北方経由で来たもの、本州の場合には北海道から来たものとされている。しかし、それらの中でアイヌの人々が所蔵していたことが確実にわかる資料は極めて少ないのが実状である。ロシアの博物館にも龍文の衣装や布地が収蔵されているが、そのほとんどがアイヌ以外の民族、つまりニヴフ、ウリチ、ナーナイ、ウデヘなどといった北サハリンからアムール川下流域の民族のものである。樺太アイヌの衣装にも絹布や絹糸が使われており、また絹衣にも樺太アイヌのもの

とされるものがある(東京国立博物館所蔵の小袖)。しかし、それらの多くは日本製の小袖に由来する。樺太アイヌはサンタン交易を通じて大陸から結構な量の蝦夷錦の布や衣服を手にする機会があったはずなのだが、その衣装やそれを装飾に使った衣装や小物類はあまり見られない。どうやらその大半を和人の方に流してしまっていたようなのである。松前藩が執拗に取り立てたことも理由の一つかもしれない。しかしそれとは対照的に、日本製の絹織物は、小袖(コソント)のような衣装から装飾に使われた断片まで結構多く見られる。それが何を意味するのか、改めて考え直す必要があるだろう。

以上、ピウスツキが収集したアイヌの衣類について、その特徴と時代的な背景を説明した。

彼のアイヌの衣類コレクションは、彼がいかに現地の人たちに愛されていたのか、また彼もまたその人々をいかに大切に思っていたのかを物語っているといえるだろう。

(ささき・しろ、国立アイヌ民族博物館)

【参考文献】

SPb-アイヌプロジェクト調査団編1998『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館
佐々木史郎編2020『アイヌ・北方諸民族の衣文化と織布文化』(科研報告書)東京国立博物館・国立アイヌ民族博物館設立準備室

Патканов, С. 1912, Статистические данные, показывающие племенной состав населения Сибири, язык и роды инородцев (на основании данных специальной разработки материала переписи 1897 г.) Т. 3. Вып. 4-9: Иркутская, Забайкальская, Амурская, Якутская, Приморская области и о. Сахалин. (Записки Императорского Русского Географического Общества по Отделению Статистики под ред. Секретаря Стат. Отд-ния О-ва В. В. Морачевского ; Т. 11. Вып. 3).

会場アンケート集計 1 (感想・質問)

- ①自分自身江別に住んでおり、対雁に強制移住させられたカラフトアイヌについて少し知識があったので、とても興味深い内容でした。実際にアイヌの血縁の方のお話はとても考えさせられました。日本人の行った行為はアイヌに対してひどいことだったんだと改めて思いました。研究者と当事者の見解の違いがより理解し合えるとよいです。(会社員、40代)
- ②ピウスツキがのこした衣服や記録など貴重な資料を見ることができてよかった。ここまで調べられていてもなかなか分からないこともたくさんあることが分かった。また、歴史の中で日本、ロシア、中国などの国に少数民族たちがほんろうされていたことが分かった。歴史の中で国につごうのいいように左右された民族の歴史を忘れてはいけないと思う。こ

- のようなことがもっと公になるといい。(学生、10代)
- ③国立アイヌ民族博物館・佐々木史郎・田村将人両氏へ、先住アイヌ民族が日本の同化政策によっておかれてきた苦難の歴史を正しく語るとともに、アイヌ民族の立場に立って、現在も差別に苦しめられている実情に学び、アイヌの人々の権利が認められるように働きかけて欲しい。(無職、70代)
- ④あつという間の講演時間でした、織物という視点でピウスツキの遺した物を見ていく機会、おもしろい視点でした。こんなに関わりの深い文化・歴史をもっと身近に感じられる機会が増えることを望みます。カラフトの歴史が今後少しずつでも開かれていくことを望みます。(パート職員、40代)

[8ページにつづく]